



LES DÉRACINÉS

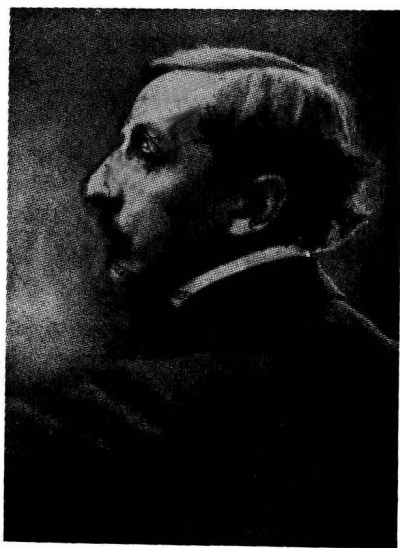
PAR

Maurice Barrès

作スレバ・スリモ

根こぎにさたれ人々

譯 松 喬 江 吉



新 潮 社 出 版



非賣品

第二期

世界文學全集(1)

根こぎにされた人々

第十七回配本

昭和七年五月八日印刷
昭和七年五月十三日發行

翻譯者 吉江喬松

發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

四

八八八八八

〇〇〇〇〇

九八七六五

番番番番番

振替東京 二三、四五〇番

東京市小石川區江西川町 富士印刷株式會社印刷

解 説

一、モオリス・バレスの作品と現代日本

千八百八十年より九十年にかけて巴里に於て最も多く讀まれたる書物は、ヴェルレエヌの詩集とモオリス・バレスの作品とである。その意味は、この期間に於てこそ佛蘭西人が個人自覺と民族意識の目醒めとに於て最も深酷な悩みを
した時代であり、深い經驗を味はつた時であり、そして詩人ヴェルレエヌと物語作家モオリス・バレスとはその深酷な
經驗を何人よりも純正に流麗に披瀝し展開し解剖してゐるからである。

七十年戦争に獨逸に打負けた後の佛蘭西は一國民としての生活も、個々人としての生活も、前途に希望を繋ぎ得ざる
經濟苦難と、従つて精神的打撃との下に喘ぎあへぐ生活をしてゐたのである。これは現代の佛蘭西人がその青年期
に於て共通に味はつた痛苦である。ロマン・ロオランが、ボオル・クロデエルが、ボオル・ブルジェが共々その青年時代に
呼吸した息づまる空氣であつた。特にモオリス・バレスに到つては、ロオレエヌ州の出生であるだけに、このやる瀬な
き心の悩みは何人よりも痛切に、切實に味はしめられずにはゐなかつたのである。

彼はこの世紀末の大痛苦の中からまづ第一に自己反省を、自己解剖を堪念に始めたのである。出来る限りの感興昂
奮を感受することゝ、それを同時に解剖して行くことゝ、斯くすることによつて、自我を確かめ自我を掴まんと努力
したのである。斯く努力しては見たものの寂しさは依然として續いてゐる。切り離されたる個我的寂寞である。

「幸福とは統一の中に於ける休息と集注とである。不幸とは雑多の中に溶け込んでしまふことである。」それは諒解せ

られた。併しその生活の統一を何處に求むべきか。生活本位を何處に置く可きか、隔離せられたる孤我ではいけぬ。孤高の寂しさは人を狂ほしくもするものである。「いかに愚かなる伴侶であるにしても、お前とても人々と伍して行く人間であるといふことを感ずべきである。人々と共に生活してゐる一人の人間であるといふ實感はずばぬがあるが、尊き實感である。周囲の人々と共に生きて行くといふ事である。併しこの周囲の人々と共に如何なる基礎に立つて生きて行く可きであるか。如何なる共感をもつて呼吸すべきであるか。それを確める事によつて初めて生活の統一が、生活の本位が打立てらるゝのである。

バレスはそこに傳統を、歴史を、信仰を、慣習を、言語を同じうする人々、自然及び人爲の環境を同じうする人々の中に存在する生活基本を、生活基準を求め出すことによつて、個我の寂寞をその共通基準に律せしむることによつて初めて、力強き熱意ある生命に轉ぜしむることが出来たのである。

自我の覺醒を民族意識に伸達し、結合せしむることによつて、力強き勢一ばいの呼吸をすることが出来たのである。

これは現實階段として人々の必然的に經過すべき順序である。バレスは、そこで、「自我尊崇」の三部作として『蠻人の眼前に』、『自由人』、及びその最後の到達點として最も完成せられたる絢美の物語『ベレ、ニス、の園』を書き、『國民的精力物語』の三部作として『根、こぎに、された人々』、『兵士への懇へ』、『その人々の面影』を書いたのであつた。

バレスの物語及び論文集はこの他にも凡そ二十種近くを擧げることが出来る。その中には彼及び現代佛蘭西を諒解するために是非讀まねばならぬ著作も多くあるのであるが、バレスの文藝作品として代表的な傑作は、我々の選出し譯した『ベレ、ニス、の園』と『根、こぎに、された人々』であることは争はれぬ。

我々はバレスのこの二作からしても現前日本の生活相の切實なる一面を深酷に讀み取らずにはゐられぬ。自己反省、

民族自覺、更に世界人への進展の過程は、バレスのこの二作ほど切實に、痛切に、微細に、周到に、懇切に描き出してゐるものはない。しかもその心理過程は、單なる個人心理の解剖に止まらず、『根こぎにされた人々』に於ては七人の青年の集合心理の交錯の姿を綜合的にも描出して、最近文藝の傾向たる交錯心理描寫の先驅をもなしてゐるのである。現在日本の青年の意識が、世界一般の共通現象として、動的、反動的、個人的、共通的、民族的、世界的の有ゆる動波の中に漂はされて、全く「根を斷たれた人々」の如く不安と焦燥との中に動いてゐる姿は、バレスのこの作品が現前如實に、鏡に映じ出すが如く、照し出してゐるのである。恐らくこの作を讀む人々にして、環境か時代かを絶して、切實に、それこそ國境を超絶したる一樣同種の心的經驗を味はない人はないであらう。

二、作者モオリス・バレス

モオリス・バレス(一八六二年—一九二四年)はロオレエヌ州のシャルムに生れ、ナンスイの學校で教育を受け巴里へ出て來たのは千八百八十三年であつた。最初文藝活動に専心してゐたのであるが、千八百八十九年に、廿七歳で郷里ナンスイから一度び代議士として選ばれ、その間にも文藝運動は捨てる事なく、前記の「自己尊崇」の三部作などはその期間にもものされたものである。千八百九十三年から千九百五年までの十二年間は、代議士生活をやめて、一方文藝創作に専念すると同時に、政治問題の研究にも没頭し、特に勞働問題、組合制度、地方主義を研究もし主張もし、それより千九百廿四年まで、即ち世を終はるまで、バレスは巴里から連續して、右黨の代議士として選出せられてゐたのであつた。大戦當時に於ける彼の愛國的活動は實際目醒ましいものであつた。彼は母系よりすれば生粹のロオレエヌ人である。父系から見れば哲人バスカルと同じオヴェルニュ出の人である。彼の面貌は全くバスカルの死面と酷似してゐる。そしてこ

の兩者の間にはカトリックの傳統が力強く波打つてゐるのである。

バレスの文學史上の地位は、ビエル・ロテイ、アナトオル・フランス、ボオル・ブルジェと共に、十九世紀末及び廿世紀に掛けての四大物語作家として、現代の若き文學者等にそれらの深い影響を及ぼしてゐるのである。

三 『バレスの園』について

これは作家バレスの「自己尊崇」と呼ぶ三部作の最後の完成を見せた、最も藝術的な、絢美な作品である。この三部作、『蠻人等の眼前に』、『自由人』、『バレスの園』を通じての主人公はフィリップと呼ぶ青年である。この青年の自我の意識の發展の跡を語る三部作である。フィリップは田舎の學校を卒業したのであるが、振返つて見れば、自分の内心に於て何も得たものはない、生活の法則も教へられず、人間として立つべき道も明かでない。唯一つ残るのは自我のみである。周圍を見廻せば自分は蠻人等に取り巻かれてゐる。「蠻人等とは、即ち自我以外のものである。自我それのみが唯一の眞實である。」そこでフィリップは自我を克く知り、深め、大きくせんがために、「自由人」として凡ゆる感覺刺激を受け入れると共に、それを片端から解剖して行かうとしたのである。その結果として招徠せられたものは、徒に狂激と疲勞とだけである。その困憊狀態から脱せんとするにはいかにすべきであるか。自己陶醉者のいつも感ずる無理解な蠻人共に取巻かれてゐるといふその感じを轉倒することである。そこで初めて『バレスの園』が展開せられて來るのである。

こゝでフィリップはロオレエヌ州を出て、南方の國、明るい光の國、歴史の影の漂ふ國へと行くことにした。この南方の、古代の歴史の夢の漂つてゐる廢都のなかで、かつて聖王ルイが十字軍を引つれて東方へ向つて出發した海港に

於て、フィリップはベレニスと呼ばれる、健康な、自然そのものの如き、しかも長い傳統のなかから生れて來た一少女に出逢つた。このベレニスは、自然そのものの如く快活で、語ることは聴き傳へた舊い昔物語ではあれど、同時に彼女は現代の空氣を呼吸してゐる生きた南國の娘である。宛かもその南國の都市が古代の歴史の中に埋もれてゐながら、現代都市の生活を營み繁榮して行きつゝある如く、この少女ベレニスの中には古代も過去も現在も共存して生きてゐたのである。フィリップはこの古都の歴史の中から鮮かに咲き出でて、現在の大氣の中に爽かな薫りを立てゝゐる一輪の花の如き少女に接して、深い一種の目醒めを覺えた。これは戀といはんよりは更に深い心の底を揺り動かしての経験である。彼は過去にも甦れば、同時に現實にも目を見開かずにはゐられなかつた。これはフィリップにとつての民族心の自覺であつた。

オギュスト・コントの「現在を支配するものは過去である」また「各個人は全的に社會へ從屬しなければならぬ」といふ哲學を具現的に切實に經驗したのが即ちこのフィリップの心理的經過である。そしてベレニスなる少女はフィリップにとつては佛蘭西そのものの再現の如くにも思はるゝのである。

四、『根こぎにされた人々』について

『根こぎにされた人々』は、作者バレスが次いで書いた「國民的精力」と呼ぶ三部作の第一篇をなしてゐる代表作である。この三部作はバレスが「個々人なるものは、いかに完全に想像しても、民族と呼ぶ一層完全なる組織の斷片に過ぎない」といふ自覺のもとに創作したる連作である。

『根こぎにされた人々』では、ロオレエヌ生れの七人の青年が田舎で學業を卒へて巴里へ出て來るのである。そして

各自がいづれも苦惱の生活をしてゐるのである。或は政治に、文學に、醫學に、或は集合し離反しつゝも生活してゐるのである。その七人の中でステュレルといふ一人の青年がこの作のみならず、三部作を通じての主人公といつてよい。彼と「自我尊崇」の三部作の主人公フィリップとを比較すれば、ステュレルは一層實際的現實的な人物である。フィリップは唯我主義と唯美と夢想との中で生成し、ステュレルは森林中の樹木の如く、それが人間の森林たる都會の中で、周囲と戦ひもし、順應もしつゝ生きて行くのである。フィリップを導くのは唯美學者のルナンであり、ステュレルを教へるのは實證學の哲人テエヌである。この哲人テエヌが如實の生きた姿を我々に見せて物を言ふ點にも深い興味が見出される。彼は一人の貧學生ステュレルの下宿へ姿を現はし、或は散歩に連れて行つて樹木を指しながら教訓を垂れてゐるのである。

七人の青年等は都會の動波に巻き込まれて、それこそ「根こぎにされた人々」として、動搖常なき生活を送らずにはゐられぬ。生活難は言ふまでもないことである。彼等の生活方向すら定まらない。その間には大ナポレオンの改葬もあれば、ヴィクトル・ユゴオの死が社會一般の感動を巻き起しもあるのである。そして深刻な戀愛事件、流血の騒ぎも起る中から、現實に目醒めたる作中主人公ステュレルのみは、確かなる足どりをもつて郷國人の代表者たる働きに身を投ぜずにはゐられないのである。

この作品に描かれたる時代は、日本でいへば坪内逍遙の『書生質』に描かるゝ時代に當る。そしてその題材もほぼ相類似してゐる。『書生質』も最初は『遊學少年』と題して、明治十年代の田舎より東京へ出て遊學する八人の青年の生活相を通じて當代を描き出してゐるのである。この時代は明治文學史上所謂「政治小説時代」である。一方に露骨なるイデオロジイの現はれてゐる所謂政治小説と、他方に冒險獵奇興味本位の文藝との交錯してゐる時代

である。

歴史的に見れば日本の現代は再びさうした傾向、一方にあらはなイデオロジイクの文藝と、他方に冒險獵奇興味本位の文藝との交錯を見する時代である。そして經濟國難、個々人の生活難、従つて政治の危機を考へさせらるゝ時代に來てゐる。それこそ「根こぎにされた人々」が都市に充ち満ちてゐる時代である。バレスのこの作品は、佛蘭西が嘗て經驗した痛苦の切實な表白であり、現代日本人が日常味はつてゐる心理過程を如實に示してゐるものであるといふ事が出來得よう。民族心から世界人への伸展過程に於て、何人でもが經なければならぬ必然な大切な心理及びその生活相を迫眞的に我々に示すのがこのバレスの『根こぎにされた人々』である。

この翻譯について、それに着手した昨秋頃から、私は神經性幽門狹窄症に悩まされて、殆ど食事もとれず、睡眠も十分に出來ず、現在に到つてゐる。従つてこの翻譯に於て、『根こぎにされた人々』は、山内義雄、小林龍雄、神部孝の三君の勞力に由るところ多く、『ベレニスの園』の方はこれも山内氏を初め土井逸雄君の手を煩はしたことを明記して以上の諸氏にこの際深大の感謝を表したいと思ふのである。

一九三二年四月

吉 江 喬 松

目次

根こぎにされた人々……………一

ベレニス の 園……………三九五

カバーの繪は一七四頁の情景

根こぎにされた人々

モリス・バレス作
吉 江 喬 松 譯

一 ナンスイ中學校

千八百七十九年十月、新學期にあたり、ナンスイ中學校の哲學科^{フィロソフィ}の者達はひどく感動して了つた。新任の教授、ポオル・プウテエ^{ポオル・プウテエ}氏は、容貌と云ひ、聲音と云ひ、話し振と云ひ、學生達が思ひもよらなかつた程、極めて上品できびきびしてゐた。一種異様な興奮が彼等の頭を掻き亂して、殆んど暴動的な騒ぎが、彼等の雨天體操場や、自習室や、食堂や、はては寢室までも満たしてゐた。といふのは、彼等はこの偉大な人と比較することによつて、彼の同僚達や、學校當局を輕蔑したのである。いつもは非常に陰氣な建物^{ビルディング}が、まるで燕麥^{オアム}を分配された厩^{うまや}のやうに活氣づいてゐるのだつた。

これまでは取るに足りない初歩の學問を反芻^{はんそう}してゐるだけだつた若人達に、今や最も強力な興奮劑^{エキサイティング}が、即ちその時

代の思想が與へられたのだつた。それは大革命以前の公立中學校^{エジ}に於けるやうなあんな立派で新しい雄辯な思想とは違つて、現に吾々の社會、吾々の黨派、吾々の巷に流通し吾々の同時代人達の中から英雄や狂人や犯罪者を生み出させてゐるところの思想だつた。恐らくさうした思想も、それが用ひ古されるにつれ、長い年月の間に氣も紛れて了つた人々の上には、いづれはその勢力を失ふことになるであらう。だが發育のおくれたわが田舎の學生達は、この千八百七十九年十月、はじめてその呱々の聲を上げたも同様だつた。それまでといふもの、彼等は、生も死も知らず、自我に關する思索のごときも未だ存在せず、まるで乳母^{ちはは}の腕に抱かれてゐるやうな、要するに呼吸が通つて居るといふだけの實は死んだやうな状態にあつた。

千八百七十九年から千八百八十年へかけてのこの學年に、如何なることが起つたか、すなはち吾々の時代の精力^{エネルギ}の或るものが、如何にして植物的生活から脱却し、一つの

危機の中にあつてそれ自身形成されるに至つたかをよりよく理解しようと思ふならば、先づ「高等中學校」なるものはつきり思ひ浮べて見なければならぬ。すなはちかゝる子供達の集團は、他の諸團體と同じやうに、兎角道德的傳染病に罹りやすいものであり、しかも一生を通じて大部分のバシリエ達(大學入學資格者)を特徴づける此上なく決定的な行動に終始してゐるものである。中學生は、自らの屬する集團から、缺點と美點との綜合物、すなはち理想人といふものについての特別な觀念を受取る。その生活を規律に従はせ、太鼓の音に従はせてゐる少年は、寂しいにつけ、嬉しいにつけ、一瞬たりとも警戒を忘れてはならないやうに仕向けられてゐる結果、行動に出づるに當つての理由として、自己内心の満足をもつてその一因素と認めることなど、殆んど考へてさへもゐないのだ。彼はたゞ他の者達からよく思はれようと専心するばかりである。十七位の年頃の田舎に育つた若者にとつては、自然の美や、道德性の微妙さなどを感ずることこそ、眞に素晴らしいことなのではないか！いつも互ひに揉まれながら、絶えず人から愚かしく思はれまいと氣づかひながら、中學生達は、かうした制約

の下に於て、また席次を成績順とする教育制度の下に於て、たゞ一つ彼等の虚榮心ばかりを異様に發達させてゐるのである。彼等は自らの中に、他の如何なる國にも見られないところの、人から卑められ、しかも野心を失はざる能力を持ち同時に頭角を擡げんするためには、どんなことでも我慢出来るやうになつてゐるのだ。

かうした短所を償ふ特質は、あの友情感に他ならない。彼等の隠語で「粹な奴」と呼ばれるのは、何かに卓越した男——詩が作れるとか、競争試験に優等だつたとかいふことの上に、更にまたいふ友達たることを必要とする。ところで善い友達といふことは、何よりも先づ規律を拒否することに出發する。規律といふものは、ちつとも憎まない譯には行かないものである。實は規律を實施してゐる者達自身、それを恥づかしがつてやつてゐるのだ。校長も生徒監も、下級生徒の前では非常に横柄で威張つてゐるが、哲学科や、直轄學校の入學志願者達の前では、一寸氣まづい氣持をさせられてゐる。生徒監達は、いづれ彼等が卒業の臨には、ピヤホールや女達の家の階段で出會ふことになることを思ひ、また未來の懸隔といふことも豫感して、ともす

れば長上者であるといふより寧ろ友達といふ様な態度を取り、不本意ながら、嫌な廻り合せで餘儀なく自分達の役目を果してゐるものだといふやうに、装つたりするものなのだ。

全佛蘭西に於て、外見まるで兵營や僧院みたいなかうした幾多の中學校は、その掟に反抗するかうした集團を包容してゐるのだ。それは、規則に従つて組織された自由人連ではなく、遂に陰謀し争闘するところの奴隸達の仲間なのだ。名譽感といふやうなもの、そこにあつては忽ち規律の蔑視といふことと混同されてしまふ。——おまけに、これらの若人達と來たら、現實に關して途方もない無智に墮してゐるのだ。

一體、彼等は人類に對して如何なる概念を持つてゐるのだらう？ 彼等は自分達の同市民をも、すべての親類をも見失つてゐる。彼等はその父母を思ふにあたり、孝行の力ともなり、喜びともなつてくれるもの、すなはち父母に絶對の謬りなしといふ考へと、又父母によつて與へられて居る援助のことさへ、どうやらこれを認めまいとするやうな傾向にある。女は彼等の目にとつて、完全な生命を持つた存在ではなく、單に異性といふに過ぎないのだ。彼女等の

前に出ると、彼等の思ふのは單に前世紀の若いフランス人達が長じてゐた誘惑のことばかり、彼等自身はいつも閉ぢこめられた生活をして居ることによつて、おど／＼して、

ぎこちなくて、誘惑なんか思ひもよらない。たゞそんな風に想像力だけが早熟な好奇心で損ねられた結果は、彼等は應接室に訪ねて來た姉妹や、從姉妹、親類の女達の前に出ても赤面するのだ。木曜日や日曜日など、ぎつしり固まつて、しかも退屈さうな散歩をする時、中學生達の氣晴らしと云つたら、往き會ふ女達を「偵踏み」するといふことにある。彼等はわざと難かしさうな様子さへ見せるのだ。そんな最初の誘ひの手で、彼等は行き會ふすべての女達、自分の氣に入らない女達さへ手に入れる光榮を擔つてゐるものゝやうに思ふらしい。そんな譯で、彼等は情熱に對しても、また庭球をやる英國の若い男女に見られる様なあゝした快活な交友振りに、全く修練されてゐないのだ。が、彼等にあつて特に目に立つ弱點は、老人達のちつとも接しないといふことだ。少年に對する老人の愛情は實に沁々としたものであり、自然そのものゝ息吹がかゝつてゐてこの上なく大きな利益を齎らすものだ。私達は十二歳の頃この

點こそわれらの短所であり、そして經驗の如何に尊ぶべきかといふことを理解した。そして私達は、何んとかして人から尊敬されるようにと努め、そして中學校の生徒達に缺けてゐるところのもの、すなはちわれらも亦いづれは老いるものであるといふ一種、精神的、詩的な豫感といったやうなものを心に抱いたものだつた。

肉親の人々から引き離され、たゞ互ひに競争するやうに仕込まれる若者達は、生活とか、生活の條件とか、生活の目的に關しては極めて憐れな理解を持つばかりだ。ナンスイ中學校では、體操の教師のやうに強壯で、獨逸語や英語の教師達のやうに數ヶ國の言語に通じ、高等學校の教授資格者のやうにラテン語學者である人間こそ世界を支配するものであるといつても云はれてゐた。人々は、すぐれた才能をも威壓し去るところの精神的な力強いもの、即ち人間の性格であるとか、又この上なく立派な天分をも萎縮させ得る境遇といったやうなものに氣が附かないで居た。彼等は前に述べたやうな、輝かしい秀才の足許に、一切の實は自然と流れ寄るものと信じて居た。不潔ではあるが几帳面な小使達の世話になつてゐる中學生達には、身すぎ、世すぎの

如何なるものであるかが分つてゐない。かうして彼等は、大學入學資格者になるに及んで、初めて自分で自分の靴を磨かねばならないことに驚くのである。

寄宿生達の精神とは大體かうしたものである。そして、彼等を前にして通學生達は對抗し得ない立場にある。すなはち、各自非常にまち／＼な家庭の影響を受けてゐる通學生達は、一旦校門をくぐるや否や、「上級」「中級」「初級」の雰圍氣を構成してゐる常例的な、確定的な意識に對して、全體としての力を對立させ得ないからだ。

初めての授業時間に、教壇に着席したボオル・ブウテュエ氏は、生徒が十分落ち着くまでは、ちつと書物を眺めてゐた。その上で、彼は臉をあげた。教室はしんとした。そして最初の瞬間から、この若い教師がある立場を支配するやうな人々の一人だといふことに就いては一點の疑ひも許されなかつた。

彼は閉ぢこもつて暮してゐる人々によく見る様な、あの艶のない、單一な調子の顔色をしてゐた。時によると、彼の目は夜更かしの勉強に疲れて些か充血してゐることがあつ

た。瞑想と智的配慮とは人の面に嚴肅さを與へる。彼の眼
眸は決して上の空でもなければ、ボンヤリしてもゐなかつ
た。然し大抵の場合それは伏せられてゐた。でない時には、
彼はちつと眞正面を眺めてゐた。従つて生徒を罰しなけれ
ばならないやうな必要も起らなかつた。彼には威嚴を持つ
てゐて、相手の名譽感に訴へるすべを知つてゐた。彼は話
した。彼は自分が立派な人間や市民を作る爲めに來たのだ
といふ高邁な責任感に就いて學生達に話した。が、學生達
にしても亦、愛國主義と社會連帯との義務を持つてゐるの
だつた。

中には筆記してゐる者もあつたが、彼はそんなことをしな
いやうにと言つた。

「これは講義の題材ではありません。こんなことに就て試
験はしません。が、卒業證書よりも、この方が遙かに大事
なものなのです。諸君は吾々が如何なる關係によつて結ば
れてゐるかをよく考へてみられて、諸君の重任をはつきり
と理解しなくてはけません……」

この言葉を聞いて、アルフレッド・ルノオダンといふ一人
の生徒が笑ひ出した。彼は、中學生たる自分に重任があら

うなどとは、未だ嘗て考へても見なかつたのだ。

教師はすぐに口をつぐんだ。その顔つきに、如何にも剛
直な理性による崇高さが示されてゐたので、全級の者達は、
犯人の方を振り向いて見ようとしなかつた。長い沈黙の
後で、

「諸君、」と教師は言つた。「私は決して所罰しない。それ
は、教師にとつても學生にとつても不面目なものだと思は
れるからなのです。だが、吾々みんなに請求の權利がある。
秩序を亂すところの者は、教室から出て行つて貰はなけれ
ばなりません。無作法者は出て行きなさい！」

ルノオダンは、これまで類例のなかつたやうな不面目な
ことで、すっかり友人達の不興を買つてしまつた。

それ以來、隣り同志で仲の好いラカドオとムシュフラン
も、歴史、地理、科學、現代語の時間以外、いたづらをし
なくなつた。

この最初の週の終りに、同じやうに有意義な別の事件が
起つた。土曜日ごとに、校長が生徒監を連れてやつて來て
は、點數を讀むことになつてゐた。中背で、きつちりとフ
ロクコオトのボタンをはめてゐるポオル・ブウテイエ氏

は、少し離れて立つてゐた。そこには彼が、かうした幹部の者達を、わざと見ないでゐることが窺はれた。彼は、幹部連を蔑視してゐたのだつた。その點、彼は、これらの反抗兒達を熱狂させた。

彼は、彼等にとつては、全能の兄のやうに思はれた。さうした態度によつて、彼は、ある日生徒監によつて開け放しにされてゐた扉を暴々しく足蹴にして閉めた數學專修科の教師に匹敵するのだつた。輿論は彼等二人の獨立性を謳歌した。若人達は休みの時間に言つた。

「校長なんて一體何だ！ 高が一警察官みたいなもんぢやないか！」

かういふ次第で、ブウテイエ氏は、法に對する尊敬とか社會的規律などに關して、自分の思ひ通りに色々と彼等に教へることが出來た。彼は、自己の個人的優越性の名に於て、單なる階級的の上位者を輕蔑した。

一方、校長と生徒監とはこんな相談をしてゐた。

「あの男の態度からみると、私の聞き合した結果が裏書きされるな。あれには後柄があるんだ。」

「誰です？」

「多分ガンベッタだらうと思ふ！」と、校長は低聲で言つた。

かうした粗野で皮肉な學生達、兎角教師を恐がる癖があつて、一番出來のいゝ者でさへ精々彼等を輕蔑するに留つてゐる學生達に對しブウテイエ氏は、まるで理智の若い神とでもいつたやうなものだつた。まだ利用されたことのない彼等の熱情からは、彼は素晴らしい感激が受け取られた。事實、モリス・レメルスバシエ、アンリ・ガラン・ドゥ・サエン・フラン、フランソワ・ステュレル、ジョルジュ・スュレ・ルフォール、アルフレッド・ルノオダン、オノレ・ラカドオ、アントワヌ・ムシュフラン達の小さな一群は、人生に向つて歩み乍ら、未だ海のものと山のものとも見別けがつかず、巴里の「哲學科」の者達に較べてずつと後れてゐる様に見えるだらう。彼等の中には大人としての力が將に爆發せんとしてゐるにも拘らず、彼の杜草と言ひ、語彙と言ひそれは全く子供の儘だつた。田舎での成人は早くないが、恐らくこれらの若人達は、田舎の長年の世襲遺傳に惠まれて何等人生の喧騒にその感激を紛らされる事がなく、従つて些か懦弱な、そして日曜日の歡樂の爲に既に好奇心を散佚してゐる巴里